9月23日　「ラザロを生き返らせる」　聖書研究

テキスト　ヨハネによる福音書11章1〜44節

ヨハネ福音書11章は、ベタニアのマリア、マルタ姉妹の兄弟ラザロの身に起こった死と、死からのよみがえりの出来事を通して、主イエスの復活の先取りが示され、主イエスに働く死の力に勝つ命の力が示されます。

⑴ ラザロの死（1〜16節）

ヨルダン川の向こうの地に活動していた主イエスの許に、マリア、マルタ姉妹から、ラザロが重篤であることが告げられます。主イエスはそれを受けて「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。」と言われて、すぐに助けに行くのでなく、むしろ二日間滞在されます。そして主はラザロの死を予知され「わたし達の友ラザロは眠っている。しかしわたしは起こしに行く。」と告げます。弟子達は真に眠りと思ったが、主の言われる「ラザロの眠り」は、彼の死を意味しました。

⑵ 主イエスは復活であり命である（17〜27節）

主イエスがベタニアに着いたとき、ラザロは葬られて既に四日も経過していました。主イエスを出迎えたマルタは「主よ、もしここにいて下さったら彼は死ななかったでしょうに。」と嘆きます。しかし主の慈しみ深さを知るマルタは、心からの信頼をもって「あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえて下さると、わたしは知っています」と主に対する望みを抱きます。それに対して主は「兄弟ラザロは復活する」と言われました。マルタはその復活を、遠い未来の終末時の復活と早合点していました。しかし主は、遥か先の未来に望みを繋ぐのではなく、今目前にいる主ご自身こそが復活であり、命であると言われました。そして「わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」と、愛するラザロの死を悼むマルタに問われたのでした。それは兄弟の死の事実を前にしてなおわたしを信じるかと、永遠の命を信じる信仰を呼び起こす問いでした。

⑶ 主イエスの怒りと涙（28〜37節）

マルタに促されて主イエスに会ったマリアも、泣き伏してマルタと同様の嘆きの言葉を主に告げました。主イエスは、マリアと共に泣くユダヤ人達の姿に、心に激しい怒りを覚え、かつ涙を流されました。主の心の激憤は死の闇の力の支配に対する憤りであり、流された涙は死の圧倒的力に嘆き悲しむ他なすすべのない、愛する者達への熱い同情と深い憐れみの涙でした。

⑷ 主イエス、ラザロ生き返らす（神の栄光）（38〜44節）

主イエスは再び心に憤りを覚えながら墓に向かい、「墓石を取り除けなさい」と命じます。しかしマルタは主の問いに「メシアと信じます」(11：27）と答えたにもかかわらず、死の暗黒の力の前に遺体の腐乱（死後四日経過）を予想したのでした。

しかし、主イエスは「もし信じるなら、神の栄光が見られる、と言ったではないか」と、弟子達への言葉（11：4）と、マルタへの言葉（11：25, 26）を思い起こさせられます。そして主は天を仰いで祈られました。祈りは「常に御心を求める祈りに応えて下さる神への感謝」と「今こそ、人々が主イエスが神から遣わされたことを悟るため」に捧げられました。

そして主が「ラザロよ出てきなさい」と大声で叫ばれると、ラザロは死から解き放され生き返って墓から出てきました。主イエスの声は、死を打ち負かしたのです。　（佐々木弘至）

9月23日　「ラザロを生き返らせる」　説教展開例

テキスト　ヨハネによる福音書11章1〜44節
参照カテキズム　子どもカテキズム　問24，36

〔単元のねらい〕

ラザロの生き返りは、主イエスの復活を指し示すしるしである。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」とおっしゃって、主イエスは十字架に向かわれた。この出来事が主イエスの十字架のきっかけになった（ヨハネ11：45－53参照）。主イエスの十字架と復活を礎として、わたしたちの復活の道、命に生きる道が切り開かれた。命の道を歩むことへと子どもたちを招きたい。

「わたしは復活であり、命である」

エルサレムにほど近い、ベタニアというところに、ラザロという人がいました。ラザロは、マルタとマリアの弟です。マルタとマリアのお話は、皆さん、おぼえていますか。主イエスをお迎えして、マルタはお世話をするために慌ただしく立ち働き、マリアは主イエスの足もとに座って話を聞いていた。「マリアがちっとも手伝いません」と言って非難したマルタに対して、主イエスが、「大切にすべきことはただ一つである」とお教えになった出来事です（ルカ10：38－42）。主イエスはしばしばマルタとマリアの家に滞在して、親しく交わりを持たれました。その二人に、ラザロという弟がいて、このとき、病気になっていました。それは、簡単な病気ではない、死んでしまうかもしれない、たいへんな病気だったようです。

このとき、マルタとマリアは、ラザロが病気であると、人づてに主イエスに知らせました。主イエスは、マルタとマリアはもちろん、ラザロのこともとても愛しておられました。ですから、ラザロが病気であると伝えたら、すぐ駆けつけて、いやしてくださると思ったのです。けれども、不思議なことに、主イエスは、急いで駆けつけるということをなさいませんでした。知らせを受けてからなお二日間、同じところにとどまられたのです。

主イエスがようやっとラザロのところに向かったのは、知らせを受けて二日たってからでした。そして、ラザロのところに向かう途中で、主イエスは、驚くべきことをおっしゃいました。「ラザロは死んだのだ。わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである」。主イエスは、ラザロが死んだとおっしゃいます。いったい何ということであろうか。死んだことをご存じであるとは驚きですし、そうであるならば、どうして、すぐに駆けつけなかったのか。二日たってからなのか。すぐに駆けつけて、いやしてくだされば、助かったかもしれないのに、と思います。

主イエスがベタニアに着くと、おっしゃったとおり、ラザロはすでに死んでいました。ユダヤでは、人が死ぬとすぐに墓に葬ります。死んで墓に葬られて、すでに四日もたっていたのです。ひょっとすると、主イエスに知らせが届いたときには、ラザロはすでに死んでいたのかもしれません。それで、むしろ、このラザロの死を無駄にしないということを考えられたのかもしれません。

主イエスが来られたと聞いて、マルタはすぐに主イエスを迎えに出ました。けれども、主イエスに対して出てくる言葉は、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかったでしょうに」ということばかりです。いったいどうして、ここにいてくださらなかったのですか、すぐ駆けつけてくださらなかったのですか。いけないと思っても、そんな言葉があふれ出てしまいます。主イエスは、そのように取り乱しているマルタに静かに語りかけます。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生

きる」。続いて主イエスは、マリアを呼び出しました。やはり取り乱していたマリアに対しても、主イエスは、マルタのときと同じように、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」と語りかけたでしょう。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」。この主イエスの言葉が、このとき、彼女たちの心にどれほど届いたでしょうか。難しかったであろうと思います。主イエスがおっしゃったことは、人間的にはとても理解できないこと、受け入れられないことだったからです。「わたしは復活であり、命である」。復活とは、いったい何のことでしょうか。「わたしを信じる者は、死んでも生きる」。「わたしを信じる」はともかく、「死んでも生きる」などということがあるのでしょうか。人間の命は死んだらおしまい。それがふつうではないでしょうか。「命あっての物種」なのであり、死んでしまったらそこでおしまい。それが当然です。

ですから、マリアはなお泣き続けますし、一緒にいたユダヤ人たちも泣き続けます。ラザロは死んでしまったのですから。愛する者、大切な友を失って、悲しんで泣くことが当然なのです。

主イエスは、そのように泣いている彼女たちを見て、心に憤りをおぼえられました。いったいどうして泣くのかと、人をとらえて離さない死の力に対して憤ったのです。そうして、主イエスはラザロの墓に向かわれます。主イエスご自身が死の力とたたかってくださるのです。ユダヤでは、墓は洞穴のように掘られていて、その中に遺体をおさめ、入口に石を転がしてふたをします。ラザロの墓のところに行って、主イエスは、ラザロの墓の入口をふさいでいた石を転がすよう命じられました。マルタが主イエスに、「もう四日もたっていますから、においます」と言います。そうです。四日もたつと、遺体が腐ってきて、におってしまう。けれども主イエスは、石を取りのけるよう命じて、お祈りをささげ、大声で叫ばれました。「ラザロ、出て来なさい」。すると、どうでしょうか。死んでいたラザロが、手足を布にまかれたままで、葬られたときの姿そのままで、出て来たのです。こうして、主イエスは、死んでいたところから、ラザロを呼び出されました。ラザロを生き返らされたのです。

主イエスは、このラザロの出来事をとおして、大切なことを教えておられます。ラザロはすでに死んで四日たっていました。それは、ただ眠っていたのではない、本当に死んでいたということの証です。その、本当に死んでいたラザロを命へと呼び出して、主イエスは教えておられます。主イエスは、まことの神であり、人に命を与えるお方である。それは、死んでいた者を生き返らせる。そのような力をお持ちなのです。ふつう、人は死んでしまえばそれでおしまいです。誰しも「死」という乗り越えることのできない壁があると思っています。しかし、実は、「死」ということを乗り越える神のみわざ、復活ということがあるのです。主イエスは、ご自身こそが「復活であり、命である」とおっしゃいました。それゆえ、主イエスを信じる者は、たとえ死んでも生きる、そのような復活の命を生きることができるのです。

このときのラザロは、そのしるしとして、再び地上の命を生きる幸いを与えられました。このときのラザロの生き返りは、その点で、ただしるしであるだけです。しかし、主イエスは、まさにこのあと、復活の命の初穂となるために、十字架につけられてくださいました。主イエスはよみがえられて、わたしたちにそのご自身の命をくださったのです。主イエスの十字架と復活が、わたしたちの復活の命の土台です。ラザロの病気と死は、その神のみわざを指し示すしるしにほかなりません。主イエス・キリストを信じて、たとえ「死んでも生きる」、そのような、神の御力にあふれる、真実の命に生きて参りましょう。　　（望月　信）

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネによる福音書 11章25節

わたしは復活であり、命である。
わたしを信じる者は、死んでも生きる。

9月23日　「ラザロを生き返らせる」　幼稚科

〈ねらい〉

イエス様がラザロを生き返らされたことを通して、主イエスご自身が復活であり命であることを知ろう。また、そのことを信じて受け入れ有ことができるように、イエス様の導きを祈り求めよう。

〈展開例〉

Q１　病気のラザロを助けるために、イエス様に早く来て下さるように願っていたマルタとマリアは、イエス様がようやく到着されたとき、何と言いましたか？」

A１　「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかったでしょうに。」と言いました。

Q２　悲しみに泣いているマルタとマリアをごらんになったイエス様は、何と言われましたか？

A２　「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」と言われました。

Q３　そして、イエス様はラザロのお墓の前に行き、何と言われましたか？

A３　「ラザロよ、出てきなさい。」と大声で叫ばれました。

Q４　死んでいるラザロは、イエス様に呼ばれて、どうなりましたか？

A４　生き返って、お墓から出てきました。

Q５　その後、イエス様ご自身も十字架にかかられて、死んだ後どうなりましたか？

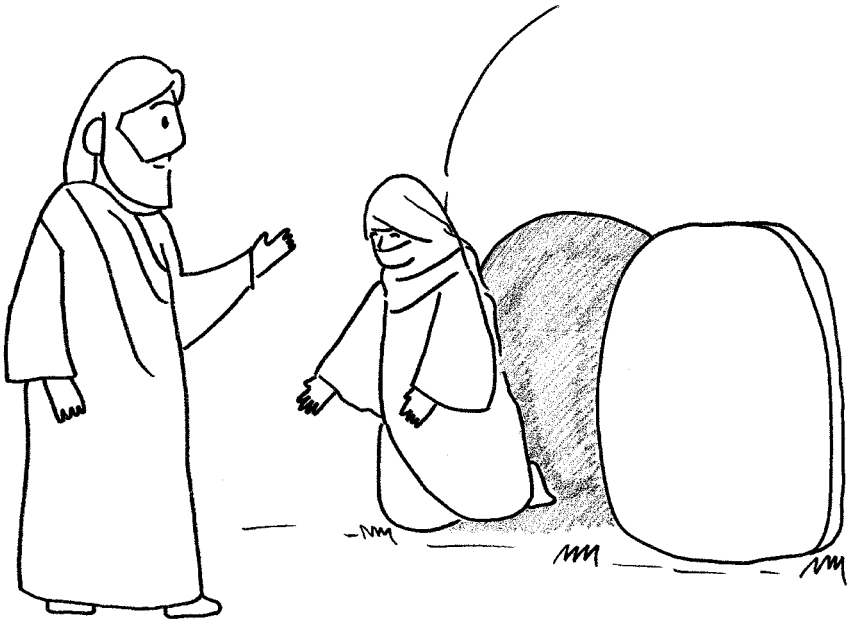
A５　イエス様は復活され、天に昇り、今も私たちを守って下さいます。

〈おいのり〉

今日も教会に来ることができて感謝します。復活であり、命であるイエス様を、救い主と信じることができるように導いて下さい。今日から始まる一週間もお守りください。

〈やってみよう〉

ぬり絵をしよう



9月23日　「ラザロを生き返らせる」　小学科下級

〈ねらい〉

ラザロになされた神様の御業を通し、神様の御栄光やご計画（死とよみがえり）が明らかにされる。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」と、イエス様が示してくださった復活の命に、わたしたちも連なっていることを学ぶ。

〈展開例〉

1. イエス様とラザロ、マリア、マルタとはどのような間柄だったでしょうか。

⇒イエス様は彼らを非常に愛しておられました。また、わたしたちの友とも呼んでいました。(5、11節参照)

2. どうしてイエス様はすぐにベタニアに行かれなかったのでしょうか。

⇒ラザロが亡くなる前に到着していたら、マルタの言うように、イエス様はラザロを癒すことができたかもしれません。しかし、それ以上のご計画がイエス様にはあったことを伝えましょう。

3. イエス様のことを信じる人は死んでも生きる、また、決して死ぬことはない、というのはどういうことでしょう。

⇒わたしたちが、今の体のまま永遠に生き続けることはありません。(コリント二5：1-10参照)しかし、イエス様のことを信じる人にとって、死は死でなくなります。死は最後でも絶望でもなくなるのです。また、神様は、御子を信じる人が、一人も滅びないで永遠の命を得させようとするほどの愛を示してくださっているとともに（ヨハネ3：16)、そう信じることができるよう、御自分の霊を分け与えてくださいます(ヨハネ一4：13)。

4. ラザロが亡くなったことを悲しむマリアやマルタ、一緒にいた人たちが泣いているとき、なぜイエス様は、悲しみだけでなく心に憤りを覚えたのでしょう。

⇒愛する友ラザロの命を奪った死に対して強い憤りを感じました。それと同時に、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」という御言葉が、素直に受け入れられないことに対しても憤られたのかもしれません。

5. なぜイエス様はラザロを生き返らされたのでしょうか。マリアやマルタを喜ばせたり、びっくりさせたりするためだったのでしょうか。

⇒聖書の本文には書かれていませんが、ラザロは再び亡くなった（はずです)。イエス様がまず初めに、本当に死に、そこから復活なさることを通して、死に打ち勝つ神様の力を示されます(コリント一15：20参照)。ラザロを生き返らせたことは、その予告であり、神様がイエス様を遣わされたことの証しでした（42節)。

6. お墓の外は明るく、生きている人々がいるのに対し、お墓の中は暗く、死んだ人が横たわっています。その間に大きな石が壁のように立ちふさがっています。イエス様の言葉がその壁を取り除き、命の光となってお墓の中に射し込みます。すると、私たちが、朝日がまぶしくて目を覚ますように、ラザロは生き返りました。

7. 生き返らされたラザロやマリアやマルタ、その場にいた人たちは、その後どうなったのか考えて見ましょう。

⇒その後、間もなく過越祭を迎え、その最中にイエス様は逮捕され、十字架につけられ、三日目に甦られました。ラザロはこれらのできごとを、どのように受け止めたのでしょう。

8. 死んでもよみがえるということを、ゲームのように短絡的に考えて、命を軽んずる危険性にも配慮が必要かもしれません。

〈おいのり〉

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」とイエス様は言われました。「主よ、信じます。」と答えられる子どもとならせてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

9月23日　「ラザロを生き返らせる」　小学科上級

☆今日の聖書箇所は長いので、11章17～44節に絞って学びます。

〈ねらい〉

イエスさまは、死の力にも打ち勝つことのできる方であることを学ぶ。

〈聖書の言葉〉

御覧になる、葬る、承知する、復活する、〇メシア、耳打ち、憤り、〇神の栄光

〈展開例〉

①今日のお話に出てくる病人ラザロとマルタ、マリアとはどういう関係ですか（11章1節）。

→毎回登場人物が変わるのでついていけない感じがあるかもしれません。まずは人物関係からおさえましょう。ここで登場するラザロはマルタ、マリア姉妹の兄弟でした。イエスさまとこの兄弟姉妹たちはとても親しい間柄で、イエスさまは彼らをとても愛しておられました（5節）。舞台はエルサレムに近いベタニアの町です。

②イエスさまがベタニアについたとき、病気だったラザロはどうなっていましたか（17節）。

→すでに死んで墓に葬られ四日もたっていました。人の死と葬りということは軽々しく扱いたくないものです。小学生くらいでは死ということの経験が乏しく、一方でドラマなどには偽物の死があふれています。死について短く経験を語りあうなどするのもいいかと思います。また、この場合の葬りということが、日本の多くの場合の火葬とは異なり洞穴に収める形であったことを注意します。

③マルタとマリアはイエスさまが来られたのを見て、まずどう思いましたか（21、32節）。

→マルタとマリアは姉妹でしたが性格はだいぶ違っていたようで、活動的で積極的なマルタと大人しく静かなタイプのマリアというふうに言えると思われます（ルカ10：38～42）。けれどもいずれも最初に言ったことはラザロが死ぬ前にイエスさまが来られなかったことを嘆く言葉でした。これまでいろいろのイエスさまの奇跡を知っていた姉妹も、死ぬ前なら病気を癒してもらえるかもしれないと期待できましたが、死んでしまった今となっては絶望的だと思われたのです。人間にとっては普通の感じ方でしょう。それほど死とは決定的な出来事です。

④今日のお話でイエスさまは死者を生き返らせる奇跡をしますが、それは何のためですか（42節）。

→イエスさまが神さまに遣わされた方であり、生死をつかさどることのできる主であることを示すためです。イエスさまは、愛するラザロが死にかかっているのを聞いても急ぐ様子がありませんでした（11章6節）。それは、イエスさまが初めからこの奇跡を行うことを予定しておられたことを意味します。このことは、イエスさまご自身が言葉のみによって命を生み出しまたよみがえらせることのできる神さまであることを示します。また、終末においてすべての人間が復活させられるということの裏付けでもあります。けれども、イエスさまは人間の感情を無視した形で超越的に行動することはなさらず、死を嘆く姉妹の気持ちに寄り添いながら、死を克服する圧倒的な力をお示しになったのです。25節でマルタに語られるように（ここではマルタは文字通りに受けとめているようには思えませんが）、イエスさまは「復活であり、命である」方なのです。

〈ヒント〉

日本でよく行われる仏式の葬儀とキリスト教の葬儀の違いなどについて語るのも死について考えるよいきっかけかもしれません。特に、身近な方の葬儀の経験があればわかりやすくなることでしょう。

9月23日　「ラザロを生き返らせる」　中学科

〈ねらい〉

復活の主を仰ぐ。

〈展開例〉

1．聖書をもう一度読む

2．分かち合い

Q．説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q．分からなかったことは？

3．質問例

Q．イエス様は、兄弟ラザロの死を嘆くマルタに復活を信じるかとおっしゃいました。私達自身の家族や教会で親しくしていた兄弟姉妹の死に直面した時にこそ、復活信仰の計り知れない恵みが際立つのです。復活ということについて、どのように信じていますか？

※話し合う中で、必要があれば教理的に補ってください。集まる子達の状態によっては配慮することも必要となります。教師自身が復活信仰の確信が強められた出来事などがあれば話しても良いと思います。

Q．イエス様はマリアたちが泣いているのをご覧になって、「心に憤りを覚え」(33節)、「涙を流された。」(35節）とあります。イエス様は何に怒り、涙を流されたでしょうか？

→人を圧倒的に支配し、愛する者達を悲しみに打ちのめす死の力に対して主は憤られた。死の強暴な支配に屈したラザロをはじめ愛する者達の置かれた罪のもたらす悲惨への同情と深い憐れみの涙であった。

Q．死後四日もたっていたのに、「ラザロ、出て来なさい」(43節）というイエス様の声によって彼は復活しました。 ラザロの復活は私達に何を教えますか？

→イエス様には死の力に打ち勝つ復活の命の力があるということ。

Q．イエス様は、「死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。」(5：25)、「生きていてわたしを信じる者は決して死ぬことはない。」(11：26）とおっしゃいました。これはどういう意味でしょうか？

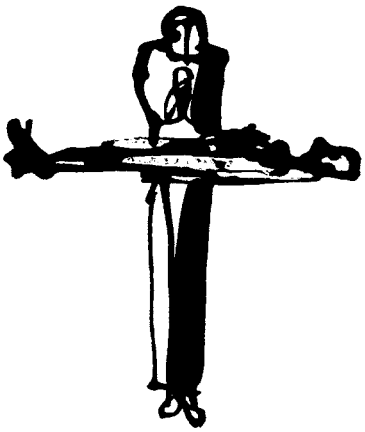
→イエス様を信じる者は、生きながらにしてよみがえりの命を生きる。死の力すらもその絆を断つことが出来ない、神様との永遠の命の交わりに生かされて生きるということである。

Q．ラザロの復活が指し示したイエス様の復活は私達にとって、どのような意味がありますか？（参照、Ｉコリント15：20）

→私達の復活の初穂。初穂とはその後に続く収穫全体を保証するものである。つまり、イエス様の復活は私達の復活の保証である。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」(11：25）とおっしゃった御約束を実現するためにイエス様は復活してくださったのである。

4．お祈り

イエス様を信じてよみがえりの命に生きれるように。



しかし、わたしは彼を起こしに行く。